



TITLE:

<卒業生は今>「若手官僚として、
今考えること」

AUTHOR(S):

田上, 翔

CITATION:

田上, 翔. <卒業生は今>「若手官僚として、今考えること」. 公共空間
2014, 12: 50-53

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197678>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

【卒業生は今】

「若手官僚として、今考えること」

京大公共政策大学院二期生（環境省勤務）

田上 翔

現在のお仕事内容を教えてください。

「環境省で地球温暖化対策関係の仕事をしています。昨年の七月に今のポストに赴任しましたが、排出量取引制度を日本に導入すべきかどうか、するとしたらどんな影響があるのかを検討するのが仕事でした。しかし、自民党も今はとにかく経済成長に全力投球、というスタンスなこともあって、今年の一月以降は、仕事の中心が予算事業の実施にシフトしています。」

役人が仕事をする時のツールは、大きくは法律、税制、予算事業と三つあるのですが、その三つ目ですね。どういうところにお金をつければ国内で二酸化炭素が減るのか、産業界に聞いたりして、予算事業を形成・執行するのです。

今は、定期的に二五年度予算事業が終わるところで、二六年度から具体的に誰とどのような事業をやっていくのか。そういう話をしています。」

これまでどのようなお仕事をされてきたのですか。

「環境省に入って一番初めのポストは水俣病関係の部署でした。大雑把に言うと、誰にどれだけお金を配るかという話になる。」

目の前の人間を何とか助けたいと思うことはあっても、政府が具体的に講じる施策は、生活の

物理的な部分をどう助けるかということになります。原資が税金なので、誰彼と配るわけにはいかず、ある症状が出たときにその原因が水俣病なのかどうかをどう判断するのか、その関係のお仕事をしました。

次は環境計画課というところに行って、環境基本計画という、今後環境政策をどうやっていくかを俯瞰したものを作っていました。ただ正直に言うと、この仕事は世の中を動かすというよりは、各部署の取りまとめ的な色彩が強かったです。環境政策のあるべき方向性を打ち出せることが理想なのでしょうが、人によって『環境政策はこうあるべき』という考え方も違っており、役所として取りまとめて発信しようとする、平板な記述になってしまします。ただ、私は水俣病という個別性が強い世界から入ったので、広く全体的なものの見方を勉強すること

ができました。

三つ目のポストは、環境省を離れて、内閣官房に行きました。内閣官房はあまり外向けには知られていない組織かもしれませんが、官邸と省庁をつなぐ役割をします。私がいた副長官補室は、面白い組織で、構成員が全員各省からの出向者なんです。各省庁から課長プラス課長補佐が係長というペアがやってくる。各省庁魅力的な方が多くて、そんな他省庁の課長さんなどと仲良くできる貴重な機会でした。

また、環境大臣が何を考えているかは当然として、官邸が何を考えているのか、日本全体で今何が問題なのか、そのなかで各分野の仕事の優先順位はどのようなものか、ということがすごく大事で、例えば東日本大震災で日本が大変な時に温暖化の方が大事だ、なんて言う、『お前ちゃんと全体を見て仕事をしろ』ということになる。こういったバランス感覚が大事で、逆に、官邸側の関心事項を読みつつも、『今環境はすごく大事です』と、こちらからしつかりインプットしなければいけない時もあります。首相官邸に『環境省としてこういうことがやりたいです』と伝わりやすいように、三年目四年目の職員だった自分が、課長級が出てきたものに入手を入れる。なかなかのプレッシャーでした。その後が、今の温暖化対策のポストです。」

環境政策の面白さはどのような点にありますか。

「他の行政分野同様、環境分野もいろんな側面があります。例えば、そもそもなぜ二酸化炭素を減らさなければいけないのかという、根本的な部分の考え方について、社会の価値観みたいなものが関わってきます。世界の偉い学者はハリケーンや、疫病や農作物の不作が起こると言いますが、誰もその未来を見たことはない。懐疑論的な見方をすることもできる。そんな中で、『起こるかどうかはわからないけれど、起こった時の影響がとて大きいので、今のうちにお金を使っておくのだ』という、信念みたいなものに基づいて施策の実施を正当化している側面がある。もちろんそうじゃない信念を持っている人もいるから議論は続いていて、将来、社会が別の価値判断をする可能性もある。

あるいは、低炭素が大切と言うときに、全く別の角度から、例えば『今の低炭素市場は少なくとも石油市場よりも流れているお金の額が大きいですよ』という風に、経済政策として正当化することも考えられる。途上国と製造コストの引き下げ競争をやり続けるのか、あるいは環境性能の高いものしか売れないようにした上で、世界で日本の市場を確保するのか、という成長戦略的な議論だっており得ると思う。

ほかに、最近では環境を、健康の視点から

考えることもある。例えば低炭素住宅というのは、結局エアコンがそれほどいらぬ、断熱性能が高い住宅を指すんですが、こうした住宅では、寒い中でいきなりお風呂に入ったりすることもないため、実は高齢者の突然死の割合が低い。もちろん高齢者でなくとも快適で健康的に暮らすことができる。

このように環境政策は、哲学的な話から即物的なメリットまで、どのようなアプローチでどう正当性を主張するのか、人によって角度も違うし、また、じゃあ今対策のためにどの程度お金を払うのか、そういうところが千差万別で、すごく難しいし、そこがまた面白いと思います。」

環境省に進もうと思われた経緯はどのようなものでしたか。

「理由は二つあって、一つは自分のやっていることが社会のためになっているか、そういう正義の感覚みたいなものが欲しいというもの。あと個人的に考えていたのは、自分の裁量がなるべくある方がいいということ。よそで決められたことを『決まっている通りにやってください』と言われるより、『自分で考えてね』と言われる方が大変で苦しいんですが、たぶん面白い。この二つに照らして考えた時、どの省庁も社会のために仕事をやっていると思うんですが、個人

の裁量については省庁によって幅があると考えました。例えば、社会保障費について、今のままではまずいことは誰の目にも明らかなのに、なかなか変わらない。それはしがらみがあり担当する人に裁量がないからだと思っています。農業でも、ずっと自給率の向上とか言っているのに大きくは変わらない。均衡点が今の状態で既に固定されていて、自由にできる部分が少ないのが原因なのかなと思っています。

環境について言えば、みんな大事と言っていて、環境をやるなという人はいない。今、私は能力の点ではまだまだかも知れませんが、ポストとして、予算をこういう風に配分してはどうか、なんて考える立場にあります。下手したらサラリーマンの生涯年収以上の予算を扱っている。そういったやりがいとはとてもあると思いますよ。」

環境省の総合職員の果たす役割について、お考えはありますか。

「私たちのようなブローパー職員はやはり特殊な立場になります。組織は、今の総合職である旧一種、その他に旧二種・三種、または外から出向されている人やバイトさんまで、いろいろな人で成り立っています。その待遇、露骨に言うてしまうと給料は当然違う。給料が違うという

ことは同じ仕事をしてはいけないということで、高いお金をもらっているのなら、やはり高いレベルの仕事が求められる。

環境省は人材交流の観点から、企業や自治体の現場の人にたくさん来てもらっています。彼らから見ると私たちプロパーは環境についてはよく知っているはずだし、環境省の中でうまく話を通すために、しつかりやってももらわないと困る。私は今年目ですが、一緒に仕事をしている方はみな年上です。メーカーやゼネコン、自治体から出向されている方もいます。人によって興味関心の範囲も違えば、この仕事を誰のために、どこまでやるのかという、思い入れも当然違う。いろいろな人がいる中で、班のトータルのアウトプットを最大化するために自分は何をするべきなのか。若手のうちからそういう状態になります。」

自分よりも社会人経験や人生経験が豊富な方と一緒に働くうえで心がけていることなどはありますか。

「勉強する姿勢でしょうか。どんなにあがいても経験値は覆せない。自分の方がポストが上でも、結局現場の知識にせよ、人のマネジメントにせよ、外から来ている人の方が上なんですよね。自分の方が上だなんて口が裂けても言えな

いし、そんな態度はとれない。そんなことを試みる暇があったら、何とか『可愛がって』もらうために、自分がしつかり勉強する。少なくとも環境のことは勉強する。仕事の中でも外でも一緒にいて『こいつは嫌だな』と思われるはいけない。そういったことは心がけているのか、やっていけないといけないと思います。」



お話して下さった田上先輩

環境政策については特に専門用語が多く、分かりやすさとの両立が難しいように感じます。

「環境省はもともとマニアックな世界から出発しています。技術の世界、つまりPPMとか普通に暮らしていれば触れないような単位で議論する世界があつて、正直誰も興味はなくて、当初はその分野の人だけが分かれば良かった。でも今は、エアコン使うだけで温室効果ガスは出てしまう。煙突を持っている人だけが知っていれば良い世界ではなくなつた。これから環境を担う人は、全く環境について知らない人に対しても説明できるようにならないといけなくなつたのかなと思います。」

その点は公共政策大学院が目指す「分野横断型な人材」に通じる部分もあると感じます。

「その通りだと思います。ほかの分野の人に分かりやすく話す、というのはまさに分野横断型だと思えます。あと、個人的に反省しているのは、当然横串を通すことは重要なのですが、『深める』ということもとても大事ななあ、それが足りなかったなあ。誰かと話をするときに、『お前面白いね』と言われる深さは、横串だけでは身につかないのかなと思います。私が今お世話になっている上司も、何か一つを深めれば、方法論が分かると言います。そして二つや

ると、一つ目とやり方の共通項を見つけることができて、三つ目、四つ目と応用ができるようになる。まあ、まずは一つ深めてみる。社会人になるとなかなか時間が取れないので、学生のうちに是非。」

今大学院のお話が出ましたが、そもそも京大公共政策大学院に進学された経緯はどのようなものでしたか。

「一つの動機は、実は格好悪くて、将来を決めきれなかったというのがあります。学部時代までに見ている世界ってすごく狭くて、インターンをしまくっていたわけでも、NPO・NGOなどの活動をしていたわけでもない。ちよつとはバイトもしていたし、サークルもしていました。基本は机の上でそれなりに真面目に授業に出て試験を受けるという学生でした。働くという生の現場に触れたことなんて、学部当時は一度もなかったし、そんな状態で、働くという覚悟ができていなかった。」

もう一つは、学部の時に法律学しかやっていなかったの、経済の話とか、国際の話とかやりたかった。自分自身、何に向いているか分からなかったの、分からない時には、できるだけ先の選択肢が広いところに進むのが良いと考えました。ロースクールまで行くとそもそも勉強

強が大変だし、見られる世界も法曹界に限定されてしまう。その点公共政策大学院だと経済学も国際もできるし、だから進学しようと思いました。」

当時の大学院の雰囲気はどうでしたか。

「みんな言っていると思いますが、とにかく自由でしたね。何を勉強しても良い。また勉強や討論だけでなく、レンタカーを借りて、淡路島や東北など、いろいろなところに遊びに行きました。その付き合いは今も続いている、この前、みんなで三浦半島に旅行に行きましたよ。」

そうそう、この『公共空間』もある種自由の産物です。もともとはハーバードビジネスレビューを目指して始まっています。大学院で頑張った学生のアウトプットの場合であればいいなと思って。公共政策大学院って世の中にどう役立つんですか、という産学官連携も当時から言われていたので、まだまだ自信はなかったけれど、将来ちゃんとできるようになればいいなと、まず始めてみようということ、立ち上がりしました。当時は経産省からいらつしやった佐伯英隆先生や後の日銀総裁の白川方明先生などが寄稿されましたね。公共政策大学院生の得意技は、『理論と現場の融合』だと思いますが、白川先生のエッセイは、そんな示唆に満ち溢れていて、

公共政策大学院の方には語り継いで欲しい名エッセイです。」

最後に公共政策大学院生へのメッセージをお願いします。

「村上春樹が『スプートニクの恋人』という作品の中で、『大事なものは、他人の頭で考えられた大きなことよりも、自分の頭で考えた小さな事だ』という趣旨のこと言っています。他人の頭で考えられたいろいろな難しいことを勉強した後、『なんで？どうして？』としっかり深めていく。自分はその他人の結論を好きなのか、嫌いなのか、どうするべきだと思うのか、ちゃんと考える。最後には単純な結論しか出てこないことはよくあると思いますが、それでも自分の頭で考えることが大切だと思います。それは、政策論争みたいなテーマでも、就職活動でも同じです。例えば、『面接では〇〇すべき』みたいなことを読んだり聞いたりしても、ただ鵜呑みにはせずに、『なんでそうすべきなの？』と考える。」

どの分野に進むにしろ、公共政策大学院は、社会に出たときに困難を乗り越えるために、自分の頭で考えて行動する、いい訓練の場だと思います。引き続き頑張ってください。」

(文責 山本剛)